

# 日本両親再教育協会における各地支部の組織化 新中間層にみる連携の事例として

Organizing Parents' Groups in Local Societies by Japan Association of  
Parents' Re-education [Nihon Ryoshin Saikyoiku Kyokai] : A Case Study of

Activities among the Neo-Middle Class in 1930s

志村 聡子

SHIMURA, Akiko

## はじめに

日本両親再教育協会（以下、協会）は、南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）社員であった上村哲弥（かみむらてつや、1893 - 1978）が発足させた、「両親再教育」を目的とする団体である。上村は、1919（大正8）年7月に東京帝国大学法学部政治学科を卒業後、満鉄に入社し、東亜経済調査局に勤務した<sup>1</sup>。1924（大正13）年から、満鉄の命により留学に赴き、帰国後の1928（昭和3）年、協会を設立、会長に松本亦太郎（東京帝国大学教授）を迎えた<sup>2</sup>。その後、協会は『子供研究講座』の発刊、機関雑誌『いとし児』の創刊などを行った。

協会や上村を取り上げた先行研究には、木村元「日本両親再教育協会」を嚆矢として、金子省子「日本両親再教育協会について 日本の親教育の系譜に関する研究」、小林恵子「両親再教育運動と上村哲弥」、柳井郁子「昭和戦前期における両親再教育運動と家族のおこなう教育 日本両親再教育協会機関誌

『いとし児』を中心に」などがある<sup>3</sup>。協会が教育の対象としたのは、新中間層の親たちであり、この点の理解では先行研究でも共通している。新中間層については、第一次世界大戦後に都市部に増加した、事務労働や専門職に従事した人々を指すものとする<sup>4</sup>。

協会は会員の組織化を志向し、これを「研究団体」ないし「母の会」と称することがあった。金子はこの「母の会」について若干の言及を行っているが、その「具体的検討は今後の課題」とするにとどまった<sup>5</sup>。ちなみに、協会の機関雑誌『いとし児』に掲載された「日本両親再教育協会規則」によれば、行うべき事業の一つとして、「児童研究団体組織ノ助成並ニ指導、コレヲ目的トスル講演、講演会ノ開催」をあげている<sup>6</sup>。本論文では、協会が会員の組織化を志向して行った継続的な試みとともに、会員の組織化が実現して支部が発足した事例とを明らかにしたい。なお、用いる資料は、機関雑誌『いとし児』（1929年8月～1943年12月）である<sup>7</sup>。

ところで、協会がその活動を軌道に乗せる

キーワード：日本両親再教育協会、支部の組織化、新中間層、1930年代

Key words：Japan Association of Parents' Re-education [Nihon Ryoshin Saikyoiku kyokai], Organizing Parents' Groups, the Neo-Middle Class, the 1930s

試みに尽力するころ、文部省では新設された社会教育局が家庭教育指導者講習会を開催し（1930年6月）、文部省訓令「家庭教育振興二閣スル件」を発する（1930年12月）など、「家庭教育の振興」を旗印にした政策を展開した。これらの政策について、千野陽一は「思想問題対策、家父長的家族制度崩壊阻止対策」として位置づけた。一方、小山静子は「イデオロギー教化」というよりも「具体的な育児・教育に対する知識・技術の伝達」がなされたと指摘した<sup>8</sup>。これらの研究は、国家と女性との関係を考察し、意義ある成果をもたらした。小山が、情報を得ようとする新中間層女性たちの動機としてその逼迫した経済状況をとらえた点は、特筆すべきである。しかし、新中間層の人々が、連携することに意味を認めて行動を起こした例などに言及はなかった。

協会における「両親再教育」の活動は、文部省の政策的要請によってなされたものではなく、いわゆる民間の活動であった。協会における会員組織化の諸相から、地域社会の紐帯に距離を置く新中間層の人々が連携を求めた事例をとらえ、新中間層の人々が受け止めた「両親再教育」について考えたい。

## 1. 会員組織化に向けた活動の展開

協会主幹の上村は、留学した米国における‘Re-education of parents’の活動に学び、「各地の会員の間にアメリカにありますやうな有力有能な研究団体」を「組織」したいと考えていた<sup>9</sup>。上村の意向に沿う形で、協会は、当初から会員の組織化に意欲を持ち、会員が集う企画を実施していた。多くの場合、この企画は「母の会」と称して行われていた。そうした協会による企画の展開は、協会発刊の『子供研究講座』に添付されていた『子供研究

講座「伝報」いとし児<sup>10</sup>、「機関雑誌『いとし児』の創刊後は同誌においてたどることができる。その形態などによって、以下のように時期区分をしたので紹介する<sup>11</sup>。

- ・第1期：青木誠四郎（東京帝国大学農学部助教授）ら心理学者による講演会（於東京）が中心で、その形式は、1928（昭和3）年11月から1930（昭和5）年12月まで行われた。
- ・第2期：満鉄社会主事を辞して協会主事となった杉本春喜が全国各地（満洲を含む）を訪問して講演をし、当地の会員組織化を促した。この試みは、1931（昭和6）年10月から1933（昭和8）年11月まで継続された。
- ・第3期：杉本が協会を離れてからは、『いとし児』誌上での呼びかけに加え、主幹の上村が自ら各地に有力会員を訪問し、会の組織化を促す（あるいは会の持続にてこ入れする）活動とが展開された。この時期については、1934（昭和9）年7月から1937（昭和12）年6月までとする。
- ・第4期：協会主幹の上村が満鉄を離れて東京在住となってから、自宅を開放して月1回行う「母の会」が催され、1940（昭和15）年11月から行われた（1943年11月まで確認）。第1期は、心理学者による啓蒙活動として理解できるが、『いとし児』誌上において会員組織化の報告はなかった。また、第4期は、切迫した戦時体制にあっても催しの試みを継続していた意欲が目引くが、会員の組織化について誌上で報じられることはなかった。こうしたことから、会員組織化の事例は、第2期と第3期から見出すことになる。なお、支部の発足が宣言され、代表格の人物が明確で、会員による学習活動の報告があった場合、

支部の組織化がなされたものと判断した。

## 2. 杉本春喜の活動と国府津支部発足

ここでは、上記の時期区分でいう第2期における動向を取り上げる。満鉄社会主事を辞して協会主事となった杉本春喜によって、精力的な啓蒙活動が展開された。杉本は、1931(昭和6)年10月から全国を巡回して講演した。杉本の経歴の詳細はわからないが、上村哲弥による「紹介」によれば、「過去八年間満鉄社会主事として令名最も高く異常の成績を挙げられた人」、「満鉄入社前 或は救世軍士官として又は自ら創立された横浜貧民学校の校長として」、「熱烈」に活動した人とされている<sup>12</sup>。杉本は、一日に数か所も訪問する活動を精力的に続けた。個人宅の集まりも団体を対象としたものも混在してはいるが、1931年から1933年までの訪問先は、約550箇所にとんだ<sup>13</sup>。杉本は、北海道方面への旅行を振り返った寄稿で、自らの活動ぶりについて次のように述べている。

日曜日もないし祭日もない而して一日も汽車に乗らない日とてもない、朝は四時半か五時に起床し夜は大抵十二時か時には一時二時頃までの活動をつづけた。一日少いと二回以上多い時には五六回の講演及座談会に出席した。よくも体が続いた<sup>14</sup>。

そんな杉本の熱烈な活動の中、神奈川県国府津の小川初枝を中心として、支部を発足させようとする動きが起こった。「寄稿欄」に掲載された小川の協会あての手紙によれば、

早速方々勧誘いたしました所、幸ひ賛成者が大へん多く訪問しました方は殆んど入会

して下さいました。まだお誘ひしない方も大分ありますのでそれ等の方がお入り下されば全部で四十人以上になる事と存じます。

とされ、小川が個別に訪問して勧誘し、40人もの会員を得る見通しを立てているとわかる<sup>15</sup>。

実際、小川は勧誘によって多くの会員入会を果たした。『いとしい』に掲載された「新会員名簿」では、小川による紹介として計55人が名前を連ねた<sup>16</sup>。翌号の「新会員名簿」でも、小川の紹介として、計28人の名前が掲載された<sup>17</sup>。おそらく、名前から判断して、すべてが女性の会員である。

そして当地で支部の発足を見ることとなった。1932(昭和7)年6月18日に、「国府津市に於て鉄道関係者諸氏に依る支部会発会式」が開催された<sup>18</sup>。これについて、杉本は次のように述べている。

三ヶ月前鉄道青年会の御依頼を受けて国府津鉄道保線事務所のお母様方の会に御伺ひしたのであるが、それが御縁となつて同通信区主任小川御夫妻の御尽力でそれ以来既に約百名の盟結同志が与へられた<sup>19</sup>。

この発言から、小川初枝の夫が「通信区主任」の立場にあることとともに、夫の職場のつながりによって、小川が「百名」もの会員を勧誘したものと察することができる。

こうして華々しく発足した国府津支部であったが、その学習活動には困難があったようだ。そうした事情を垣間見るような、小川がしたための協会あての手紙の2通が、「会友より」と題した寄稿欄に掲載された。内容から、講演を行う講師の派遣を懇願している

ことがわかる<sup>20</sup>。翌号に掲載された小川の協会への手紙も、講師派遣を「熱望」した内容となっている<sup>21</sup>。ちなみに、協会主幹の上村は、自著において、「児童研究団体」は「創立する事よりは寧ろ其れを維持して行く事」に「最大の困難」があるとし、維持する「秘訣」として「有益な参考書を選択すること」などを挙げていた<sup>22</sup>。国府津支部では、会員だけで学習活動を進めていくことに困難があり、協会から派遣される講師の講演に繰り返し「接する」必要があった。

こうして活動する国府津支部であったが、翌1933年の某日、小川は次のような手紙を協会あてに送った。

さて今度主人事横浜通信区勤務を命ぜられ思ひ出多き国府津を後に去る八日表記の箇所に移転いたしました。国府津在住中は先生には一方ならぬ御世話になり色々とお御指導をうけ御かげをもつて母の会も生れ漸く会も盛大になりつゝある時に残念に存じまず、（以下略）

このように、小川は夫の転勤で転居となり、国府津支部の営みから離れることとなった。国府津支部発足から数えて約1年であった。小川は「私共と同時に御転勤なされやむなく脱会された方」にも言及しており<sup>23</sup>、職業柄土地に定着することの難しい、俸給所得者の生活を垣間見ることができる。以後国府津支部の話題は『いとし児』誌上で取り上げられなくなるので、小川の移転を機に、支部の活動は勢いをなくしていったものと考えられる。

ところで、中内敏夫は、著書において「鉄道従業員の家族」を管理する「家族会」が組織されたことに言及し、そこに「鉄道大家族

主義」を見出した<sup>24</sup>。上記の国府津支部発足は、協会からの働きかけに小川らが応じた形であったが、別の要因として、企業の側の家族管理の必要性などについても考慮する必要がある。

### 3. 上村哲弥の活動と各地支部の発足

会員の組織化を促すべく、各地を精力的に回った杉本は、何らかの理由で協会を離れたらしく、1933（昭和8）年12月発行の『いとし児』に掲載された記事の以後、誌上で記事がとだえた。ここでは、第3期の動向を取り上げる。

1934（昭和9）年7月発行の同誌において、「本会支部開設」と題し、以下のような記事が掲載された。

本協会は、今般全国各地に支部を開設することに致しました。一昨年来、本会の講師が全国各地を歴訪致し、数百回に渡つて講演会や母の会等を催しまして、育児上の実際問題に就て、直接各地の会員皆様と、親しく御目にかゝりましたが、其の成績に鑑みまして、今後は支部の開設により、会員皆様の育児研究及び母の会等の開催に就ては支部に於て連絡を計り、本部との完全なる結合を以て今後益々盛んにしたいと存じます<sup>25</sup>。

このように、あらためて協会は会員に向けて支部の発足を促した。

協会が「支部開設」のために行った取り組みとして、主幹の上村の派遣（2回の講演旅行）をあげたい。1935（昭和10）年6月12日に、東京帝国教育会館にて、上村を囲んだ「母の会」が開催されるとの予告がされた<sup>26</sup>。上村

は、東京において講演を行っただけでなく<sup>27</sup>、次には名古屋に立ち寄った。名古屋では、6月某日(期日は不明)桜楓会(日本女子大学校卒業生の同窓会)名古屋支部や「名古屋文教協会」の尽力によって、名古屋千代田ビルホールにて上村の講演が行われた<sup>28</sup>。その後、神戸と門司を経て福岡に着き、某日(期日は不明)午後1時半、南博幼稚園において、「市内の基督教幼稚園が主催」で「母の会の集り」が開催された。さらに同日午後7時半から、福岡日日新聞社講堂において、講演会が行われた<sup>29</sup>。そして鹿児島においても講演を行い、その足で大連への帰路についた<sup>30</sup>。

さらに2年後の1937(昭和12)年5月、上村は2回目の講演旅行を行った。5月15日午後1時半から、東京帝国教育会館において、上村を囲んで「会員の集り」が開催された。さらに、上村は、東京市中野区高井戸第二小学校での「母の会」、沼袋学園での「母の会」にも赴いた<sup>31</sup>。大連への帰路、上村は大阪に立ち寄った。5月28日午後2時半から、大阪朝日クラブにおいて、朝日新聞社会事業団訪問(ママ)婦協会の保良せき子の「斡旋」で「約五十名」の母親たちが集まり、上村はそこで「両親教育と家庭教育」と題して講演を行った<sup>32</sup>。その後、神戸、坂出、門司にて講演を行った(これらについては後述)。

上記2回(1935年6月と1937年5月)の上村による講演旅行は、支部発足やその後の活動のてこいれを目的としたものと考えられる。では、『いとし児』誌上においてその支部活動の経緯が読み取れた3例を以下に取り上げたい。

#### 門司支部の事例

門司在住の吉本茂樹は、『いとし児』に頻繁

に投稿する読者の一人であった。吉本は、『いとし児』に「若き父の断想」を投稿したのを始めに、多数の投稿を行った。吉本は自らを「プロレタリアの私達一家」、「会社の片隅で算盤を握る私」<sup>33</sup>、「会社勤めの薄給サラリメンの一人である私」などと表現していた<sup>34</sup>。父としては「童心を多分にもつ事」、「決して子供に怖がられてはならぬ」、「あらゆる場合に父の顔は微笑みあれ！」(ママ)と述べ、「母への甘やかな思慕」と同様の「思慕」をわが子に望み、威厳のある父親像を退けている<sup>35</sup>。わが子の日常を論じた文章を発表してきた吉本は、「関節炎のため病床」に過ごし、「つくづくと子供といふものを眺めて暮し」<sup>36</sup>、さらにまたその成果を投稿した。

「子供の生活は親の生活の影」として<sup>37</sup>、自らの生活態度を反省し、それを機関誌上において語るという形で協会に参加してきた吉本であったが、杉本や上村など協会関係者の来訪を受けて、深い親子関係の中に身をおくのみならず、周囲の親との連携、協会への加入の呼びかけなどを課題とするに至った。1933(昭和8)年4月の杉本春喜による突然の門司地区訪問に際しては、講演会開催に奔走した。吉本は、報告記事において「この意義ある会合を一度に終らしめずこの集合を一転期として北九州から自覚あるインテリ層を母体として、熱烈な両親再生運動が起ることを希んで報告を終る。」と述べている<sup>38</sup>。そして、1934(昭和9)年7月発行の『いとし児』において、「本会支部開設」と題して「支部開設」を働きかける記事が掲載されると、吉本は支部開設に「尽力」する意志を伝えた<sup>39</sup>。

その翌々月号の「編輯だより」に、吉本に関わる近況が報告された。記事では、吉本が門司支部を発足させたことや、「この二ヶ月

で既に五十名の新会員を拡大」したことが紹介されている<sup>40</sup>。合わせて「新会員名簿」には、吉本の紹介による新会員23人の名前が掲載された<sup>41</sup>。ちなみに、掲載された氏名は、ほとんどが男性の氏名となっている。

さて、吉本は、1935（昭和10）年6月18日午前、各地で講演旅行をこなしてきた上村哲弥を門司に迎えた。同日午前10時から、青年会会館において、「母の会」が開催され、「信愛保育団団児（信愛保育園園児か、引用者）の母の会を母体」とした関係者が「五十名以上」集った。さらに吉本宅にて、「数名の者」が「上村主幹を中心として座談会」を開いた<sup>42</sup>。

上村を迎えた後も、吉本を中心とした活動は持続した。吉本が協会あてに送った「門司支部短信」によれば、同年9月22日の夜、「門司市大里聖徳幼稚園に聯合協力して」、「母と子どもの座談会の準備会」を開催した。集まったのは「小数の父達」3名（宮本、垂水、釘本）と「母達」5名（三上、清水、新井、小田、指原）と河野聖徳幼稚園園長夫妻、そして吉本の11名で、「真摯に保育の体験を語りあつて夜のふけるのも忘れたぐらい」だったという。話し合いの中で、翌月に第一回座談会を開催することや、規約の決定、役員選挙、研究題目の選定を行った<sup>43</sup>。

しかし、その後の「門司支部通信」では、吉本の苦悩を読み取ることができる。「通信」の冒頭、吉本は「日本両親再教育協会門司支部、看板だけはいい。が内容に至つては貧窮、お話にならない。」などと述べ、支部の活動が奮わないことを伝えている。吉本によれば、支部発足後、行ったこととして、「子供に関する座談会」を3回、上村の訪問の機会をとらえた「子供に関する講演会」を1回であった。また、「門司支部の会報」として「パンフレツ

ト」を刊行したが、1回で中止したという。「会員の増加運動」については、「機に臨み変に応じあらゆる手段をもつて努力をつづけてゐる。」というが、「省みて自己の無力をつくづくと感ずる。」としている<sup>44</sup>。

上村による2回目の講演旅行（1937年6月）に際しては、吉本の元にも、上村訪問の知らせが届いたが、折しも吉本は、「本社への転勤」を命じられて「身の異変の中」にいた。吉本は、上村を迎える準備や「突発事件」の処理に追われた。6月1日、門司市内の信愛保育園にて母親たち「三〇人」が集い、上村による「両親教育と家庭教育に就て」の講演が行われる運びとなった。同日、続いて小倉市立幼稚園に会場を移し、こちらでも母親たち「四十余名」が集まり、上村の講演を聞いた。そして、翌日6月2日、吉本は、熱丸丸に乗り込んだ上村を見送った。この催しを最後に、吉本は門司支部の活動を離れ、家族とともに大阪に転居した<sup>45</sup>。以後、門司支部の活動報告が『いとし児』誌上に登場することはなかったため、吉本の転居を機に、門司支部の活動は事実上終わったと言えるだろう。ちなみに、吉本は、大阪に転居してからも寄稿し、「いとし児の双葉を、大阪にきつとそだてます。」と記しているが<sup>46</sup>、その後、支部発足に成功した形跡はない。

吉本が機関誌に頻繁に投稿する形での個人的な活動から、連携を志向した活動へと変わったきっかけの一つは、協会から派遣される講師による働きかけであったと考えられる。ただ、連携への志向については、協会からの要請だけをとらえるのではなく、吉本自身の中にも、動機をとらえることができよう。吉本の言う「自覚あるインテリ層」によってもたらされる「熱烈な両親再生運動」への期待が

らは、自身の親としてのあり方だけでなく、地域の人々の親としてのあり方への関心をも読み取ることができる。

### 神戸支部の事例 福岡への活動の継承

神戸でも支部が発足した。ここでは上山幸一と福永津義子を有力な会員としてとりあげることができる。門司支部の吉本同様、上山幸一も『いとし児』に多数その文章を掲載された人物の一人であった。その職業については不明だが、「某仏教日曜学校にも関係」<sup>47</sup>、「須磨太子日曜学校」の「御手伝に行つてゐる」と明かしている<sup>48</sup>。1935年6月に行われた上村による1回目の講演旅行の折、上村は、6月17日午後1時半に、神戸在住の桜楓会（日本女子大学の同窓会）会員の集いにおいて講演した。上山は、その会に参加して講演を聞いた。会の最後に「座談会風なお話」になり、参会した者の「半数以上」が「いとし児」会員になったという。さらに同日午後7時半、上山を中心とする「神戸市中の会員の会合」が須磨太子館で行われ、そこでも上村の講演が行われた。集った20人は「誰も彼もが、子供の問題に熱のある人々」で、「いとし児」の持つ使命が先生の口から一同に伝えられるや、神戸支部は結成された」という<sup>49</sup>。

この神戸支部が結成されるに至った須磨太子館での集まりに参加していた福永津義子は、牧師である夫とともにキリスト教主義幼稚園での保育に携わっていた。福永は、『いとし児』に寄稿する一方、夫と共著の著作を出版するなど、協会とは別に出版活動の場を持っていた。しかし、これまで協会発行の『子供研究講座』や『いとし児』などを用いて「毎週一回母の座談会」を行ってきたという。福永は、「尚『いとし児』を通じて一人でも多く

の正しき母心が醒まされますやう、あせらず、たゆまず祈りつづけ度う存じます。」と述べ、5名（すべて女性の氏名）を新会員として紹介した<sup>50</sup>。

その後も、福永は、母親達との活動を重ねた<sup>51</sup>。1935（昭和10）年の10月から、「五六人の同志」が集まって、「毎週一回子供の性格教育座談会」を開いているという。10月には、「胎教と、生後八ヶ月までの乳児についての座談」を行い、「胎教」については、『いとし児』第5巻第9号を「皆で回読」したという。その座談会では、胎児は「胎内で母親の気分を吸収してゐるやうに思ふとの考への元に話」が進んだと福永は伝えている<sup>52</sup>。

上村による2回目の講演旅行（1937年）では、5月29日午前中、福永の経営する早緑幼稚園で、上村を囲んで「母の会」が開催された。同日午後1時半から、市立湊川小学校において、神戸市社会課と神戸市の聯合母の会との共同主催で、「四百人」の聴衆に上村が「愛児を正しく強く賢く育てる母のための講演会」という題目に添って講演を行った。同日夜には、再度早緑幼稚園で10人が集って座談会が行われた<sup>53</sup>。福永は、上村に接した印象を、「厳と慈とがこのやうにも溶けあへるものか」と驚いたといい、「厳父、慈母の真の姿がのみこめた」と報告している<sup>54</sup>。

福永は、両親教育を目標とし、自らの幼稚園では、父親が参加しやすい時間帯に「両親の会」を開催するなどの配慮をしていた。とはいえ、新中間層の生活様式からして、母親たちの方が実際に幼稚園に足を運ぶことがたやすい立場にあり、実質は「母の会」となりやすかった<sup>55</sup>。

その後、神戸支部の記事は掲載されなかった。その理由の一つとして、福永が福岡に移

転したことがある。福永は、1940（昭和15）年4月から、招かれて西南保姆学院保育科主任に着任し、保姆養成に携わった。西南保姆学院は、1944（昭和19）年4月に福岡保育専攻学校と改称し、福永はその校長となった。一方、既にあった舞鶴幼稚園に加えて、新たに付属幼稚園が開設されたが、福永は、神戸時代に経営していた幼稚園と同じく早緑幼稚園と名づけ、それら2園の園長も兼任した。戦後、福永は、福岡保育専攻学校校長と西南学院短期大学児童教育科科長を歴任し、2つの幼稚園の園長も兼任した<sup>56</sup>。

福岡では、母親たちが「みのり会」なる集まりを組織し、読書会や各種の活動を行った。戦後復刊した『いとし児』（両親教育協会発行）に寄稿した坂口喜代子は、「福永先生を中心として『みのり会』が出来ました時、始め十二、三人の集りでしたが、只今では全部の会員の方々が必ず全員揃って『いとし児』を中心に学んで居ります。」と記している<sup>57</sup>。福永は、福岡にその拠点を移してもなお、母親たちの教育活動に取り組み続けた。のちに「みのり会」は、キリスト教教会（鳥飼バプテスト教会）へと発展した<sup>58</sup>。

神戸支部では、上山は仏教、福永はキリスト教とその立場は異にしても、宗教主義をその活動の方針に掲げる人物が指導者的存在となっていた。上山は仏教日曜学校、福永はキリスト教幼稚園でそれぞれの活動を行い、機会があれば、ともに神戸支部としての活動を行ったと考えられる。福永が福岡に転居したのちの神戸支部の活動については不明であるが、福岡においても、福永を中心とする活動が展開された点は、特筆すべきである<sup>59</sup>。

### 鹿児島、坂出の事例

上村哲弥は、1回目の講演旅行（1935年6月）で、鹿児島市にも立ち寄った。その後、給田彩子を中心として、支部発足の準備がなされ、1936（昭和11）年3月10日午後1時半から、鹿児島支部発会式が行われた。医師で「宗教家」でもある望月章や、敬愛幼稚園のフィンレーの力添えもあり、フィンレー宅で12名が集って発会式を営んだという<sup>60</sup>。記者（記事内容からして上村主幹の弟の上村勝弥であろう）によれば、給田彩子は、「奈良高等師範学校出身」（奈良女子高等師範学校出身？）で、3人の子どもの母親であり、夫は鹿児島女子師範学校教諭だという。給田彩子は、1935（昭和10）年8月以来、新会員を「一百名近く」も紹介したとされる。記者が給田彩子から聞いた言葉を紹介した文章によれば、「気の弱い私」ではあったが、上村哲弥を鹿児島に迎えて、上村の「両親教育への熱情と理想」を知って、「ぞつとしてみられぬ気持ち」になったという。そして「自分でも不思議な位の勇氣」が出て、母親を見ると『いとし児』を勧めないことが「不親切で怠慢であるとさえ」感じるという<sup>61</sup>。その後1936（昭和11）年9月、給田一家は、給田茂太郎の転勤に伴い、香川県坂出に転居した<sup>62</sup>。

さて、上村は、2回目の講演旅行（1937年）において、坂出を訪ねる。5月30日午前、給田彩子は坂出で上村らを出迎えた。夫の給田茂太郎は香川女子師範学校校長となっており、附属幼稚園で「母の会」を催して『いとし児』を紹介している旨、寄稿している<sup>63</sup>。給田彩子によれば、5月18日頃協会から上村が坂出に立ち寄る旨連絡を受け、「この有り難い機会を、私共夫妻だけでうけては勿体ない」として、講演会を企画することにした。そして、

案内状を「約七百枚」用意して、27日に附属小学校と附属幼稚園の子どもたちを通して配布するなどして宣伝に努めたという。その甲斐あってか、5月30日当日は「約二百人」が講演会に集い、上村は2時間半、「両親再教育の意義、家庭教育の重要性」について論じた。「同日の御講演のために加えられた新会員もまけて約百名になりました」と、ここでも新会員の勧誘に大々的に成功している給田彩子の報告があった<sup>64</sup>。実際、「新会員紹介」の記事で、給田彩子の紹介による54人の新会員の氏名が掲載された<sup>65</sup>。坂出における支部発足の報告は見られなかったが、給田夫妻は、それぞれの立場で『いとし児』購読を宣伝し、会員を獲得した。

給田一家は、気心の知れた住み込みの使用人を伴って転居を繰り返した。給田彩子は、転校によって傷心するわが子の姿に心を痛めていた<sup>66</sup>。そんな事情の中、夫妻は『いとし児』会員勧誘に努めていた。一家は、戦後、長野県に転居した。最終的に5人の子どもに恵まれ、給田彩子は、大学生から小学生までの子どもたちの母親として、復刊になった『いとし児』に寄稿している<sup>67</sup>。給田茂太郎の「三重師範時代の生徒中でのご自慢の弟子」<sup>68</sup>とされる菊川（菊川きくゑ<sup>69</sup>のことであろう）は、「いとし児の会員」を増すことに尽力しており、師範学校で茂太郎の指導を受けた教育関係者にも、協会賛同者が育っていた。給田彩子は、長野の地でも、多数の会員を勧誘した<sup>70</sup>。

給田夫妻は、鹿児島在住の折は、幼稚園関係者を交えて鹿児島支部の発足に尽力した。坂出在住の折は、夫が女子師範学校校長であった立場から、附属小学校と附属幼稚園の保護者を巻き込む形で活動した。夫妻の子どもたちが附属小学校や附属幼稚園に通ってい

たかはさだかではないが、妻も精力的に協会に関わる活動を行っていた。転居するたびに、その地で多数の会員を勧誘していた夫妻であったが、師範学校教員の夫と、自身の子育てに専念していた妻とでは、協会の活動を必然とした理由をそれぞれに求める必要があるだろう。妻の立場に着目するならば、各地を転々とする中での子育てには心細いものがあったに違いなく、雑誌『いとし児』の購読ないし協会への勧誘は、同様の境遇の人々への接点を得る機会の一つとなっていたと考えられる。

### まとめ 日本両親再教育協会における各地支部の組織化について

以上のように、国府津、門司、神戸、鹿児島などにおいて支部が発足し、それぞれの活動の事実があった。協会の呼びかけや、上村哲弥らの訴えに共感を持ち、支部を発足させる人々や、会員を大々的に勧誘する人々が数人浮き彫りになった。

とりあげた事例においては、鉄道従業員の共同体において支部が発足した例（国府津支部）、民間会社事務職男性が支部を発足させた例（門司支部）、仏教主義を掲げる日曜学校関係者やキリスト教主義幼稚園関係者が関与して支部が発足した例（神戸支部）、高学歴女性とその夫である師範学校教員とが支部発足や会員獲得に尽力した例（鹿児島支部）などあり、必ずしも共通の土壌で支部が発足したわけではない。どの支部も代表格の人物の転勤などに伴って、活動を継続できないという憂き目にあっていた。支部の代表者は、転勤の可能性あることを承知の上で、短期間の組織化でもそこに意味を見ていたものと考え

られ、そこに強い連携への意欲をとらえることができる。そうした素地に、協会から派遣される講師による熱烈な働きかけがあって、支部が発足したと考えられる。

そもそも、わが子の教育に熱心で、競争原理をわがものとする新中間層の親たちであるから、連携にはむずかしさが伴ったはずだ。しかし、連携を志向した会員たちは、子どもを育てる親としてのあり方を問う試みに賛同したと考えられる。どの支部も長期に持続したわけではないが、子どもを育てる親同士が学び合おうとする活動が展開された点について、ひとまず評価したい。親としてのありようが、他者と学び合う中で他者にさらされる。そこに、親としてのあり方を反省する機会が与えられたと考えられる。

本論文においては、支部の組織化を順次追ったが、会員一人一人の思想にまで踏み込むことができなかつた。今後の課題としたい。（引用部分の漢字については、適宜新字体にあらためた。）

## 註

- 1 上村哲弥の履歴書（日本女子大学所蔵）による。なお、同資料閲覧に際しては、真橋美智子氏にお力添えをたまわった。
- 2 「上村哲弥略歴」上村哲弥『生命を育くむものしつけのいろは歌』（上村哲弥『しつけのいろは歌』の漢字やかなづかいを改めて発行したもの）1978年、両親教育協会、164 - 166頁。上記の履歴書（日本女子大学所蔵）では、「満鉄留学生として欧米主要国に於て修学調査視察」の時期として、「大正十四年四月より昭和三年六月まで」（1925年4月から1928年6月まで、引用者）と記されており、留学の時期において異なる記載となっている。このずれについての調査は、今後の課題としたい。なお、この本を所有していた小林恵子氏には、本の貸与等の便宜を図っていただいた。
- 3 木村元「日本両親再教育協会」編集委員会編『叢書 産む・育てる・教える 匿名の教育史 1 教育 誕生と終焉』藤原書店、1990年。金子省子「日本両親再教育協会について 日本の親教育の系譜に関する研究」『愛媛大学教育学部紀要 第部 教育科学』第38巻第2号、愛媛大学教育学部、1992年。小林恵子「両親再教育運動と上村哲弥」『研究紀要』第27集、国立音楽大学、1993年。柳井郁子「昭和戦前期における両親再教育運動と家族のおこなう教育 日本両親再教育協会機関誌『いとし児』を中心に」『教育学研究室紀要 教育とジェンダー 研究』第5号、女子栄養大学栄養学部教育学研究室、2003年。そのほか、村田恵子「雑誌『いとし児』における「読者」像の分析」『教育学研究紀要』第41巻、第一部、中国四国教育学会、1995年。草野明子「上村哲弥の子ども観と家庭論 『子供研究講座』を中心に」『（あるふあ）：児童文化・児童文学研究誌』第8号、日本女子大学児童文学研究室、1999年。桜井智恵子「日本における子どもの権利思想の展開」許斐有ほか編『子どもの権利と社会的子育て』信山社、2002年。
- 4 新中間層に関する文献は、以下の通り。東京府内務部社会課編『東京市及近接町村中等階級生計費調査（大正十一年十一月施行）』（奥付なし。「凡例」の期日は「大正十四年三月」となっているので、発行日はこの期日に従って、1925年3月とする）。大橋隆憲編著『日本の階級構成』岩波書店（岩波新書）1971年。寺出浩司「大正期における職員層生活の展開」日本生活学会編『生活学 第七冊』ドメス出版、1982年。沢山美果子「教育家の成立」編集委員会編『叢書 産む・育てる・教える 匿名の教育史 1 教育 誕生と終焉』藤原書店、1990年。中村牧子「新中間層の誕生」原純輔編『日本の階層システム 1 近代化と社会階層』東京大学出版会、2000年、など。
- 5 金子前掲書、230頁。
- 6 「日本両親再教育協会規則」『いとし児』第4巻第12号、日本両親再教育協会（以下、『いとし児』の

## 日本両親再教育協会における各地支部の組織化

- 発行元略) 1932年12月、41頁。この記事は、札幌大谷短期大学図書館所蔵の『いとし児』当該号に掲載されていた。これより前の号で同様の「規則」を見つけられなかったため、会の創立から4年経っているが、この記事から引用した。ただ、この「規則」がどの時点でつくられたかは不明。
- 7 『いとし児』の閲覧に際しては、札幌大谷短期大学図書館、文教大学越谷図書館、東京家政大学図書館、日本女子大学図書館、頌栄短期大学図書館、神戸女学院大学図書館にお世話になった。
  - 8 千野陽一『近代日本婦人教育史 体制内婦人団体の形成過程を中心に』ドメス出版、1979年。小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年。
  - 9 上村哲弥「両親の再教育と児童研究(一)」日本両親再教育協会編『子供研究講座 第一巻』先進社、1928年、384頁。(目次では、「両親の再教育と子供研究」となっている。)
  - 10 「母の会」『子供研究講座「伝報」いとし児』第3号、先進社、1928年12月、19 - 23頁。
  - 11 拙稿「1920 - 30年代における家庭教育思想の社会的展開 「教育する母親」の問題化とその指導」2004年3月、東京学芸大学(博士論文)。巻末の「補論 日本両親再教育協会の組織化」参照。
  - 12 上村哲弥「本会主事杉本春喜氏を紹介し併せて御願ひ致します」『いとし児』第3巻第9号、1931年9月、36頁。
  - 13 『いとし児』第3巻第12号から第5巻第12号までの当該記事から、数えた。
  - 14 「旅を終へて」(「杉本生」とある)『いとし児』第4巻第12号、1932年12月、33頁。
  - 15 小川初枝による寄稿『いとし児』第4巻第7号、1932年7月、37 - 38頁。
  - 16 「新会員名簿」『いとし児』第4巻第7号、1932年7月(奥付がないので、表紙の右端の発行日)40頁。
  - 17 「新会員名簿」『いとし児』第4巻第8号、1932年8月(奥付がないので、表紙の右端の発行日)36頁。
  - 18 「編輯だより」『いとし児』第4巻第7号、1932年7月、40頁。
  - 19 「編輯だより」(「杉本」の記名がある)『いとし児』第4巻第8号、1932年8月、39頁。
  - 20 小川初枝による寄稿『いとし児』第4巻第11号、1932年11月、36頁。
  - 21 小川初枝による寄稿『いとし児』第4巻第12号、1932年12月、37頁。
  - 22 上村哲弥「両親の再教育と児童研究」日本両親再教育協会編『子供研究講座第五巻』先進社、1929年、367頁。のちに、単行本『両親再教育と子供研究』に再録。
  - 23 小川初枝による寄稿『いとし児』第5巻第7号、1933年7月、40頁。
  - 24 中内敏夫「労働者家族のおこなう産育と就学」『中内敏夫著作集Ⅰ 家族の人づくり 十八～二〇世紀日本』藤原書店、2001年、86 - 87頁。
  - 25 「本会支部開設」『いとし児』第6巻第7号、1934年7月、23頁。
  - 26 「編輯だより」『いとし児』第7巻第6号、1935年6月、42頁。
  - 27 上村による講演が、上記の予告通りの期日に開催されたかどうかは明らかでないが、講演内容は、『いとし児』誌上において紹介された。上村哲弥「子供の感受性と父母の影響 子供はママ環境を吸収する」『いとし児』第7巻第8号、1935年8月、4 - 10頁。
  - 28 北沢つね「主幹講演会報告」『いとし児』第7巻第7号、1935年7月、40頁。
  - 29 (塩か?引用者)川ヒデ子「福岡母の会」『いとし児』第7巻第7号、1935年7月、40頁。
  - 30 「編輯だより」『いとし児』第7巻第7号、1935年7月、42頁。神戸、門司、鹿児島での活動については、後述する。
  - 31 「主幹上村哲弥先生の上京につき急告!!!」『編輯だより』『いとし児』第9巻第5号、1937年5月、8頁、46頁。「上村主幹を迎へて」『いとし児』第9巻第6号、1937年6月、42頁。
  - 32 植村友彦「上村主幹に從ひて西下の記」『いとし児』第9巻第6号、1937年6月、42頁。
  - 33 吉本茂樹「若き父の断想」『いとし児』第2巻第7号、1930年7月、40頁。
  - 34 吉本茂樹「私と正昭」『いとし児』第2巻第10号、

- 1930年10月、35頁。
- 35 吉本前掲「若き父の断想」。
- 36 吉本茂樹「病床より児を觀る」『いとし児』第5巻第4号、1933年4月、36頁。
- 37 吉本茂樹「ノートから」『いとし児』第3巻第6号、1931年6月、39頁。
- 38 吉本茂樹「小倉に於ける母の会及座談会の報告」『いとし児』第5巻第5号、1933年5月、36 - 37頁。
- 39 吉本茂樹による寄稿『いとし児』第6巻第8号、1934年8月、45頁。
- 40 「編輯だより」『いとし児』第6巻第10号、1934年10月、39頁。
- 41 「新会員名簿」『いとし児』第6巻第10号、1934年10月、39頁。
- 42 吉本は門司と小倉とに住まいを持っていたのが事情は不明だが、「小倉では数名の者が小生宅にて、上村主幹を中心として座談会」を開いたと記され、吉本の肩書きも「門司小倉支部担当者」とされている。吉本茂樹「門司支部だより」『いとし児』第7巻第7号、1935年7月、40頁。
- 43 吉本茂樹「門司支部短信」『いとし児』第7巻第10号、1935年10月、32頁。
- 44 吉本茂樹「地方支部だより 門司支部通信」『いとし児』第8巻第1号、1936年1月、45頁。
- 45 吉本茂樹「さらば門司よ小倉よ」『いとし児』第9巻第7号、1937年7月、34 - 35頁。
- 46 吉本茂樹「十周年を祝して」『いとし児』第10巻第7号、1938年7月、55頁。
- 47 上山幸一「『いとし児』へ寄す」『いとし児』第5巻第1号、1933年1月、45頁。
- 48 上山幸一「私の児童觀」『いとし児』第5巻第2号、1933年2月、34頁。
- 49 上山幸一「主幹を迎へて」『いとし児』第7巻第7号、1935年7月、40頁。
- 50 福永津義子による寄稿『いとし児』第7巻第8号、1935年8月、40頁。なお、福永の名前は、つぎ、つぎ子、津義、津義子などと表記に一貫性がないが、同一人物と判断する。
- 51 福永津義子は夫福永盾雄を亡くし、幼稚園園長となる。「吊詞」『いとし児』第7巻第9号、1935年9月（奥付の発行日は誤り、表紙右端より）、25頁。
- 52 福永つぎによる寄稿『いとし児』第8巻第1号、1936年1月、46頁。
- 53 植村友彦「上村主幹に從ひて西下の記」上山幸一「主幹上村先生神戸訪問記」『いとし児』第9巻第6号、1937年6月、42 - 44頁。
- 54 福永つぎ子「母としての反省」『いとし児』第9巻第7号、1937年7月、33 - 34頁。
- 55 福永津義子の長女である高橋さやか氏への聞き取り。他の幼稚園に比して、「あの幼稚園は父親が行事に多く参加する」と見られていたといい、父親たちは仕事を休んだり早退したりして幼稚園の行事に参加することに、気恥ずかしさを感じることなく実践していたとされる。
- 56 西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史 上巻』学校法人西南学院、1986年、458 - 466頁。「歴代科長のおもかげ」『児童教育科35年のあゆみ 世のひかりをめざして』西南学院大学短期大学部、1975年、20 - 21頁。「歴代園長のおもかげ」『早緑子供の園30年のあゆみ あいされることも』西南学院、1979年、12頁。
- 57 坂口喜代子による寄稿『いとし児』復刊第1巻第9号、両親教育協会（以下、復刊した『いとし児』の発行元は略）、1950年8月、56頁。
- 58 『舞鶴幼稚園60年のあゆみ ひかりの子らしく』西南学院舞鶴幼稚園、1973年、9頁。
- 59 今後は、福永の思想について、考察を深めたい。まず、以下を参照されたい。拙稿「福永津義における「両親再教育」 日本両親再教育協会との関わりから」『日本保育学会第58回大会発表論文集』日本保育学会第58回大会準備委員会、2005年、12 - 13頁。
- 60 「支部結成」『いとし児』第8巻第3号、1936年3月、7頁。給田彩子「『いとし児』鹿兒島支部発会式」『いとし児』第8巻第4号、1936年4月、41頁。
- 61 「編輯後記」『いとし児』第8巻第5号、1936年5月、44頁。
- 62 「記者附記」（給田彩子による短歌への附記）『いとし児』第8巻第10号、1936年10月、29頁。給田彩子「上村哲弥先生を坂出に迎へて」『いとし児』第

## 日本両親再教育協会における各地支部の組織化

- 9 巻第 6 号、1937 年 6 月、44 - 45 頁。
- 63 給田茂太郎による寄稿『いとし児』第 8 巻第 12 号、1936 年 12 月、47 頁。
- 64 給田彩子前掲「上村哲弥先生を坂出に迎えて」。
- 65 「新会員紹介」『いとし児』第 9 巻第 7 号、1937 年 7 月、43 頁。
- 66 給田彩子による短歌の内容から。『いとし児』第 8 巻第 10 号、1936 年 10 月、29 頁。
- 67 給田彩子「なつかしき思い出」『いとし児』復刊第 1 巻第 1 号、1949 年 12 月、42 - 43 頁。
- 68 上村哲弥「わが最善の二週間（つづき） 支部会友歴訪記」『いとし児』復刊第 1 巻第 12 号、1950 年 11 月、46 頁。
- 69 菊川きくゑによる寄稿『いとし児』復刊第 1 巻第 10 号、1950 年 9 月、38 頁。
- 70 例えば、『いとし児』復刊第 1 巻第 10 号（1950 年 9 月）の当該箇所では、給田彩子紹介による新会員 13 人の氏名（男女の氏名混在）が掲載された（36 頁）。